

# Paul Bloom の TED 講演 *The origins of pleasure* (2011) に関する覚書

黒田 航/Kow Kuroda  
杏林大学 医学部//Faculty of Medicine, Kyorin University

Created: 2016/05/25; Modified: 2017/03/18

## I はじめに

本文書は、Paul Bloom (以後、PB と略記) の 2011 年の TED 講演 *The origins of pleasure* の提起している人間の性質を考察する。本稿で私が主張するのは、次の 4 つである: i) PB が取り上げている心理・生理現象は、ヒトの知覚や認識の特性と言うより価値形成の特性である、ii) (PB が講演で示唆しているのと違い) ヒトの価値形成の仕方は一様ではない。iii) 特に、複製に芸術性を認めるか認めないかは、個体差が大きく、PB のような態度は (典型的かも知れないが) 決して一般的ではない。iv) 問題の反応の個体差は、価値形成で、知覚が優位な場合と知識が優位な場合を両極とする連続体を想定すれば、無理なく説明できる。

## 2 何が問題なのか? — 論点の整理

### 2.1 Paul Bloom の主張の要約

PB は彼の講演で、次の事を主張する:

(I) ヒトは、生まれつきの本質主義者 (natural born essentialists) であって、知覚できない本質 (hidden essences) に反応して価値を形成する生物である。

これは PB 自身による要約ではなく、私の解釈が加わったものである。その理由は、この要約の「価値を形成する」という (おそらくもっとも理論的に

重要な) 部分が、彼の主張にはハッキリ含まれていないからだ。

PB は自分の講演が何を共通して扱っているものなのか上手に定式化できていない。それは§3.2 で後述の理由で (苦楽のような) 感覚ではなく、(美醜や善悪のような) 価値の形成なのだが、その点を彼は自分の講演で前面に出していない。表面的に彼がやっているのは、ヒトの感じる快感や苦痛の感じ方を幾つか (実験や臨床報告を含めて) 例に取って、ヒトはモノゴトを見た通り、味わった通り、聴いた通り、要するに、感じた通り=知覚した通りにでなく、それ以上のものとして受け止めていない事実を示している。

具体的に言うと、彼は次の順番で事例を紹介している:

1. Art: Painting — Han van Meegeren による贋作の評価。

2. Food — i) 子供にニンジンを食べさせる、牛乳を飲ませる時に McDonald で買ったと言うと、おいしさを増進できる; ii) ワインを飲む時、安物でも高価なワインの瓶に入れて飲むとおいしく感じる。しかも主観的においしく感じるだけでなく、身体的においしく感じている (脳の快楽・報酬系がそのように働いている)。

3. Sex — i) 性欲が興味に対象に対する想定によって大きく左右される; ii) 愛情は自己強化する (付き合いを通じて相手の魅力が増す); iii) Capgras 症候

群の例が示すように、同じ人物に対する評価が劇的に変わり得る。

4. Consumer products — i) 有名人の所有/関与した物品 (J. F. Kennedy の所有していたゴルフクラブ, Britteny Spears の噛んだガム, Bush 元アメリカ大統領に投げつけられた靴, George Clooney の着用していたセーター) に対して選好的に生じる (奇妙な) (付加) 価値; ii) 思い出の品の (付加) 価値。

5. Art: 再度 Painting — i) Marc Chagall の真作と複製の価値の違い; ii) Jackson Pollock の絵と (Jackson Pollock 風の絵を描く) Marla Olmstead の作品の価値の違いを、美術に関して哲学的考察をした Dennis Dutton の *The Art Instinct* を引用しつつ説明。

6. Art: Music — i) Gene Weingarten の企画した The Washington Post 実験 (Joshua Bell の演奏が、演奏者の素性がわからない状態で聴かれた場合に価値を維持するか?) の結果; ii) John Cage の「反音楽」作品 4'33" (実質は無音楽状態) が iTunes で 1.99USD で売られている事実。

7. Pain — 快感について言える特性が苦痛についても同じように言える事を、i) Kurt Gray と D. Wegner が行った実験結果と ii) 一定の条件で苦痛が快感に変わる事実に基づいて例証。

PB が取り上げている事例で、価値が前面に出ているのは、1, 4, 5, 6 の芸術 (美術品と音楽演奏) の例と 3. 消費者向けの商品の例である。紹介された事例や実験結果が示しているのは、彼自身のまとめによると、ヒトの感じる快樂や苦痛には、実際に感じられた通り以上の意味を持つという (奇妙な) 性質があるという事実である。

## 2.2 異論の提示

PB は講演の後半で、自分は Marc Chagall の絵が好きで、彼の絵を贈り物に貰えたら嬉しいが、複製だったら要らないと言う。彼は真作にしか芸術

的価値がないと考え、Dennis Dutton の *The Art Instinct* から引用しながら、その根拠を成立の歴史/来歴/履歴 (history) の違いに求める。真作と複製、あるいは真作と贋作は成立の歴史が違う。最初のもの=真作 (originals) を生み出す=創造するには労力が必要だが、贋作や複製はそうではない<sup>1)</sup>。彼が M. Chagall の真作に認め、複製に認めない芸術的な価値は、この歴史の違いを反映したものであると彼は主張する。

私はこの PB の主張に強い違和感を感じた。特に複製に芸術性が (認められ) ないという主張は、私には全然納得ができない主張である (贋作に価値を認めるかどうかは、だますという別の要素が係わるので、複製とは同列に扱えない)。

本講演で PB が行っている芸術感に良く似た主張は、小林秀雄の随筆『真贋』にもあった。この作品を読んだのは今から 30 年以上前の事で、自分は 10 代だったが、その時に強く感じた違和感が、PB の講演に触れた事で再燃した感が自分にとってはある。

この違和感の正体は、簡単に言うと次の通り。芸術作品—特に美術品—が本物かどうかは、私にとっては全然重要でない<sup>2)</sup>。例えば私は (Marc Chagall の絵はまったく好みではないが) Paul Klee や Wassily Kandinsky や Joan Miró の絵が好きで、質の良い複製なら、それを見ているだけで幸せになれる (し、実際、ほとんどの作品の真作を見た事はない訳である)。本物と複製の両方を見比べた事がある絵 (例えば Leonardo da Vinci の作品や Francisco de Goya の作品) に関しても、複製から得られる快

<sup>1)</sup>これは芸術に限った事ではない。一般的に言って、オリジナル=最初のものを作成する費用は、それを複製する費用より桁違いに大きい。これはイノベーションのジレンマとして知られる現象であり、また古くは Theodor Adorno が複製が容易になる事で芸術性が低下すると嘆いた状況の原因である。

<sup>2)</sup>ただし、偽作と贋作は同じでない。贋作は美術品に特有な現象で、他の分野には偽作しかない気がしている。これらを区別した上で、偽作に価値を認めるかどうかを問う事が可能で、それは興味深い問題を提起する。

感は本物から得られる快感に明らかに劣るが、それでも複製は十分に心地良いものである。

この事は私自身にとってまったく明らかなので、PBの主張はまったく理解できない訳である<sup>3)</sup>。加えて、PBの主張を聞いて、私と同じように違和感を感じている人も、世の中に少なくないのでは?と知っている。

### 3 感覚と価値の統合理論の試み

#### 3.1 問題の整理

では、PBは誤った主張をしているのか?それに対する答えは、おそらくYesでもNoでもある。

私としては、問題を次の(2)のように問い直し、それに答える事で、ヒトの価値形成の一般理論を一步先に進めたい。

- (2) 人々の芸術性の感じ方、もっと一般的に言う  
と価値の感じ方は一樣なのか?

私はこの答えはNoだと思っている。つまり芸術性の感じ方には個人差が—驚く程に大きな個人差がある<sup>4)</sup>。だからこそ、次の事が言えるのである:

- (3) (A) 真作に複製にない芸術的価値を認める事には何の問題もない。だが、(B) 複製が真作が持っている価値の一部を持っていない事を理由に、それらに芸術的価値を認めないのは経験的に真でない主張=勇み足である。

要約すると、PBは(A)の点で正しく、(B)の点で誤っている。

<sup>3)</sup>小林秀雄に主張に関しては、贋作をつかんだという、強く自尊心を損傷する事態が、感覚レベルの享楽を凌駕した可能性はある。

<sup>4)</sup>これにはおそらく、自分が幼少の頃から芸術に係わってきた事が影響している。

#### 3.2 感覚の問題か? 価値の問題か?

これは芸術性に限った事だろうか? 私の推測ではそうではない。これは、より一般的に、価値形成のレベルでの個人差の特殊な場合だろう。この抽象度の高い価値形成方略の個人差が例えば、暗示にかかりやすい人とそうでない人の違いに対応しているのでは?と私は推測している(ワインの味わいについて言うと、私はラベルに左右されないとと思う)。

これが冒頭で私が、PBは明言していない事だが、彼が取り上げている現象の真の共通項が価値の形成の基盤に関するものであると言った理由である。快感や苦痛は価値そのものではないが、価値の形成に特に働く感覚レベルの要素である。

一方、PBのような感じ方をする人が相当の割合で存在する事は、経験的に真である。そのため、自分がPBのような感じ方をする人間が存在してもおかしくない事を説明する感じ方のモデルが必要である。

価値形成の個人差を記述するモデルを仮説として、次に明示的に示そう。

#### 3.3 価値形成の基盤の両極性

私の予想では、価値形成は一般に(PBが論じている様に一樣ではなく)、次の(4)に示すP/SとK/Cの二つの場合を両極とする連続体=スペクトラム構造をなしている:

##### (4) 価値形成の両極性スペクトラム構造

P/S型: 価値形成で知覚/感覚情報が優位(perception/sensor dominant/driven)な場合/個体

K/C型: 価値形成で知識/概念情報が優位(knowledge/concept dominant/driven)な場合/個体

補足として述べて置くなら、同一個体でも感覚モダリティごとに異なった方略に従っている可能性があり得る(例えば、食べ物ではP/S型だが、美術品の評価ではK/C型であるとか)。

これは次にあるような、幾つかの興味深い予測を可能にする:

- (5) a. K/C型の価値形成をする個体は、(知覚情報を無視するので)暗示にかかりやすいが、P/S型の価値形成をする個体はそうではない。
- b. K/C度合いが高い程、(PBのように)複製に芸術的価値を認めず、P/S度合いが高い程、(私のように)複製に芸術的価値を認める。

更に大胆な予測をすると、おそらくAspergerの個体は極端にP/S度が高い個体であり、暗示の影響を受けない。

以上はいずれも経験的に検証可能な仮説である。ただ、私自身が実験を手がけて妥当性を確認する事は難しい。誰か興味のある人に挑戦して貰いたいと思う。

### 3.4 まとめ

以上に示したのは、PBの講演の意味の、より一般的な視点からの相対化である。この相対化は、PBの講演の価値を貶めるものではなく、すぐれて示唆的な彼の講演の示唆を精練させ、その魅力を更に高めるものと私は期待している。

## 4 余波

私は先日、自分が担当している英語の授業の一つで本講演を取り上げ、その解説の一部として、感覚と価値の違いを強調した上で、上述の仮説を紹介した。そうしたのは、PBの講演がいかにも示唆的で

あると言っても、なされている主張を学生が文字通りに受け取る事になったら良くないと思ったからである。私としては、批判的読解の実践をして見せたつもりだった。

それを聞いた学生の一人が授業が終わった後に私の所に質問に来た。その学生が言うには、自分はPBと同じタイプで、芸術作品(音楽の演奏や絵画)の価値は自分では全然ピンと来なくて、他の皆が良いって言うから良いんだと思うタイプなんです。そう言っている人たちは、いったいどうして作品の良さがわかるものなんでしょうか?

要するに、彼が言いたいのは

- (6) 価値の基盤が感覚でなく知識にある(自分を含めた)人々にとって、芸術作品の価値は、実体のないもの(例えばデマのようなもの)などではないんでしょうか?

という事なのである。

これは極論すると、確かに正しい。だが、そう言い切ってしまうのは、正しくないという直観が私にはあった。彼に事態を説明するには、次のようにした。

### 4.I 価値(感)は(通貨のようなものとして)流通し、共有される

(4)で想定した連続体を考えます。そこで、次のように考えたらどうでしょうか?

- (7) a. P/S極に近い所にいる人たち同士(「感覚派」と呼びましょう)は価値形成が同質なので、価値が共有されている。
- b. K/C極に近い所にいる人たち同士(「知識派」と呼びましょう)は価値形成が同質なので、価値が共有されている。
- c. 感覚派と知識派はこのままでは価値が共有できない。

- d. ここで感覚派と知識派の中間的な個体群（「中間派」と呼びましょう）の存在を想定する．i) 中間派は感覚派と同一反応をする訳ではないが，価値形成の基盤を部分的に共有しているので，結果的に感覚派と中間派の間で価値が部分的に共有されている．
- e. 同様に，ii) 中間派は知識派と同一反応をする訳ではないが，価値形成の基盤を部分的に共有しているので，結果的に知識派と中間派の間で価値が部分的に共有されている．
- f. ここで更に，価値が言語という媒介によって（通貨のように）流通すると考える．とすると，感覚派が見出している芸術作品の「真の価値」は中間派の媒介によって（伝播の途中で相当の劣化があるとは言え），知識派にも伝わる．

これが私に鋭い疑問を投げかけて来た学生が満足する答えだったのかは，残念ながら確かめられていない．

#### 4.2 その後

2016年に本試論の執筆の動機になったのは，ある学生からの質問だった．彼の芸術の価値に対する意見は私にとっては想定外のものであり，彼がどうしてそのように考えているのか理解する事が私の考察の目的だった．

その後，私は Paul Ormerod の著作 [?] を読んで，異例なのは自分の反応の方なのだと思った．Ormerodによれば，価値形成は相互的適応的なプロセスで，大半の人が何かに価値を認めるのは，他人がそれに価値を認めている場合である．これは正に学生が私に指摘した事なのである．

私は Ormerod が著作で主張している事の大半について同意できるのだが，その一方で (4) に示した P/S 型と K/C 型の区別が反映する意志決定もあるだろうと予測している．それと同時に，専門家の判断は P/S 型に寄りがちであるとも予想できる．専門家とは，そもそも特殊な（高次）知覚を発達させた人であると定義する事が可能なのである．この定義の妥当性は未検証であるけれども．

## References

- [1] ポール オームロッド．経済は「予想外のつながり」で動く．ダイヤモンド社，2015．[原典: Paul Ormerod: *Positive Linking: How Networks Can Revolutionize the World*, Faber & Faber, 2012.]